2011年　12月11日・「常陽新聞」では

「結城文学」の藤貫さんが初の詩集
「人間を信じること」テーマに

今年も1年を振り返る時期を迎えた。文学的な営みにとっても、3・11東日本大震災と続く原発事故の惨劇をどう作品に繰り込むかは、生々しく手ごわい課題。本紙にリレーエッセイを連載した文学同人「結城文学」事務局の藤貫陽一さん（39）＝結城市国府町＝は11月下旬、3・11と原発被災体験をきっかけに自らの文学テーマを凝集した、初めての詩集「緑の平和」を出版した。文明や知識、科学技術がもたらす軋み（きしみ）をさりげない日常からとらえ返し、平易な詩の言葉が命を得ている。国難となった転換期の「3・11後をどう生きるか」を考えさせるとして、静かな反響を呼んでいる。（市毛勝三）

3・11ショックきっかけに

■3・11で出版が現実に

「私はマスクをしない
体の中がセンサーだ
なんて言えるのは
150km離れているから
私にマスクを
強要したら
そのときは」
（私のセンサー）

3・11大地震による福島原発事故発生に、藤貫さんは得体の知れない不安と恐怖に襲われた。その切迫感から「少しでも遠くに逃げよう…」と、着の身着のままで都内の友人宅に転がり込んだ。「何もそこまで」と周囲はいぶかるが、放射性物質の汚染拡大に言いようのない不安と恐怖は膨らむばかり。停電騒ぎで大阪まで逃げたが、手持ちの金が続かずに1日で避難生活を切り上げ、帰郷した。

大学中退後に発病した疾患から、世間が常識として思い描く人生ルートからは外れた人生を歩んでいた藤貫さんだが、3・11ショックは改めて「とにかく生き続けよう」「生きていく手段と根拠を見つけなければ」という自分自身への強い使命感をもたらした。その一つが、渇望にも似た文学への熱い思い。この時期、思いがけず出版資金の捻出が可能になる状況が生まれ、「40歳までには本を出そう」という以前からの思いを後押しした。

こうして34歳から現在まで書き続けた詩作品を収めた藤貫さんの第1詩集「緑の平和」は、3・11ショックをきっかけに世に出ることになった。

■重い主題をさりげなく

「ベランダに　落ちていた
こうもりの　赤ちゃん
逃がしてやったら
飛んでいった」

（こうもりになれよ）

藤貫さんは自らの病気を直接のライトモチーフとはしていない。心の問題だけが肥大化しがちで、内向的な傾向になることを懸念するからだ。だから自己愛や被害者意識を先行させる、攻撃的な表現スタイルを嫌う。人間は社会的な存在であることを避けらないだけに、自分を棚上げせずに時代や社会と切り結ぶ地平で、しかも理念や抽象世界に逃げずに、さりげない日常や自然の風景、人間関係などに等身大の視線で目配りする。

今回の第 1 詩集は書店に置いたほかに、詩人らに 500 部へ友人知人に 200 部を配布した。読者からは、「優しい言葉で書かれてあり、横柄な押しつけがましさがない」「感性が清々しい。若い人への優れたメッセージ」「画一的な体質を批判し、からかっているところがいい」「統一されたリズム感があって気持ちいい。暗喩（メタファー）が効果的」「主題が明確で好感がもてる」「新鮮な素材を構成し、そこに寓意を存在させている」―など 70 通を超える好意的な感想が寄せられた。

現代詩といえば難解な作品イメージを抱きがちだが、藤貫さんは重いテーマを生活者の言葉でさりげなく詩に紡ぐ。「短い詩は俳句の影響。俳句と同じく日常の営みを書いている」し、「本にすると、作品をまとめて読んでもらえる。自分のテーマや考えの全体像が分かってもらえる」と出版の意味を強調した。

■自分を自由に解放

「父は
まだ子供なのだと　と言う
純粋なだけだ
いや　私は　強く言おう
異種なのだ
私は
実験室を逃げ出した異種なのだ」

（大学の実験室）

数学が得意という理由だけで藤貫さんは県外にある大学の工学部に進学。しかし、肌が合わずに中退した。学生時代は小説を読みあさり、試みに一編だけ詩を書いて友人に見せたが、さんざんな評価だったため、文学活動の興味は小説にシフト。自らも小説家を志し、孤独に習作を続けた。

帰郷してからは新日本文学賞や茨城文学賞を受賞した地元の作家、大洞醇さんが主宰する「結城文学」に加わり、厳しい作品合評会で鍛えられた。俳句にも親しみ、そのうちに再び詩に向かい合うようにもなった。藤貫さんは言う。

「3、4 年前までは盛んに小説を書いていたが、壁にぶつかり、次第に小説の書き方に迷いが出てきた。形式に縛られてしまい、だんだん小説を書くことが不自由になるのとは逆に、詩は自由に書け自分を解放できる。好きなように書いて、自分の思いや考えをストレートに言葉に乗せられる。自分には詩が向いていると考えるようになった」

藤貫さんの作品の底流には、科学技術や知識、学問を過信する現代社会への批判意識が貫かれている。科学技術の発達は、人間の万能感やあくなき可能性幻想を肥大化させてきたが、それが人間にとって本当に幸せの実現なのか？　例えば、先端技術の集成で文明を象徴するコンピュータはもはや生活に不可欠だとしても、その先に何があるのか？　人間はどうなるのか？

作品の後書きで、藤貫さんは「しかし、文明あるところに、哲学もある、文学もある。コンピュータ社会が、この先どうなっていくか、人間は、この先どうなるのか。それを考えていったとき、最後に残るのは、人間を信じること、ではないだろうか」と記している。

「数学者よ
コンピュータを打ち負かせ
ヴェジタリアンよ
栄養学を書き替えよ

実用品は
企画回収となれ
人々よ　口々に
名前を呼びあおうではないか」
（憧憬）

と紹介されています。